

第2分科会 外国語教育 2016

政府の動向に翻弄される英語教育とそれに対抗する諸実践の報告

犬上達也

1 今教研の特色

(1)参加者

1日目の参加者 一般教員 10名 学生 9名

2日目の参加者 一般教員 6名 学生 3名

ここ数年の傾向であるが、一般教員の参加率およびレポート数が伸び悩んでおり、残念ながら今回もそういった状況が見られた。また今回は大学教員が不在であるとともに、現職の教員も少なく、討論また分科会の持ち方について課題が見られた研究会であったといえる。参加する一般教員については高等学校教員、中学校教員を含め、やや固定化されてきている。また、今回については残念ながら小学校教員の参加は見られなかった。また、学生の参加については1日参加することで「単位取得」に利点があるということで、研究にかける時間やアルバイトの関係から2日間の参加が厳しいという状況が見られた。

(2)レポート

- ①ビジネス英語の取組 北海道芦別高等学校 佐藤琢磨
- ②英語の授業をコミュニケーション広場に 北海道釧路商業高等学校 関山信雄
- ③犬上英語～楽しみ・達成感をどう与えるか 南富良野中学校 犬上達也

2 討議の柱

(1)外国語教育の現状と課題－生徒の学力の実態・外国語教育の現状と今後をとらえ、実践と研究を明らかにする。

- ①外国語教育の目的と全体構造を明らかにする。
- ②学習指導要領の問題点を実践的・理論的に明らかにする。
- ③評価方法を課題を明らかにする。
- ④小学校での外国語活動の実態と課題を明らかにする。

(2)外国語教育の内容と方法

- ①言語体系（音声・文字・語彙・文法）の教育内容と方法を明らかにする。
- ②言語活動（音声コミュニケーションと文字コミュニケーション）の教育方法と方法をあきらかにする。
- ③取り上げる材料の選定・掘り起こしを行い、その指導過程を明らかにする。

3 討議内容

(1)1日目

1)教育のつどい2016 in 静岡 外国語分科会からの報告（犬上）

実践報告を持って参加した犬上より、分科会でのまとめを報告した。

報告では、小学校外国語活動が指導要領の改訂により、「教科化」されてしまうことについての問題点、それを推し進めることの行政に見られる矛盾が明らかになった。教育改革にお金をかけずに、現場の奮闘にばかり頼る文科省の教育政策

には、ほとんどうんざりするのではないのでしょうか？

2) 英語授業を英語で行うこと、小学校外国語活動、小学校英語について

分科会への学生の参加が多いこと、次の指導要領では現在の小学校外国語活動から教科化されるとの動きがあるため、レポートとは関わりなく、問題点や指導について討議がなされた。

その中で寄せられた意見、質疑は以下の通り。

- ① All English で、と文科省は言っているが、しばらく英語の学習から離れている教員が多い中で正しい英語を使って指導することは難しいのではないかと。簡単な内容であれば、英語による説明は可能だと思われるが、生徒にとっては難しい。まして高校での授業を英語で、ということになった場合、ついて行くことができない生徒が出てくるとと思われる。
- ② 生徒が英語ができないということがよく言われるが、「言いたいことがない」から言えないのではないかと。自分の確固とした意見を持つことを育てなくては行けないはず。
- ③ 英語が苦手だから（英語以外の）教員になった人が多いはず。さらに英語を教える資格・技能がない、あるいは不十分であるにも関わらず実施に踏み切ることが無理があるのではないかと。
- ④ 小学校では ALT を活用した授業が主となっているが、ALT の動静を踏まえた上で時間割が編成されるため、しばらく授業がなく、後日 4 コマまとめて外国語活動を実施するという授業を受ける側である子どもの状況を無視した対応も見られる。

3) 犬上レポート「犬上英語～楽しみ・達成感をどう与えるか」

南富良野中学校 犬上達也

定年退職を控えた犬上氏は、38年間の教員生活で感じてきたことを基本に

① 英語の歌の実践

英語の歌については、歌のリズムやメロディーの助けを借りて英語の持つリズムや発音を習得、日本語特有の拍のリズムを矯正し、子音結合の発音の矯正が図られることが効用として上げられている。生徒の声域に合わせることができるよう、自身のギター伴奏で取り組んでいることを紹介した。

② Bullet（弾丸）Reading の実践

単元の中に登場する英文から生徒に暗記させたい英文を12～15文をピックアップし、Bullet（弾丸）Reading と称して生徒同士による練習、さらには暗唱につなげる取組を紹介した。また、英文がやや難しくなる3年生に対しては、今年度、個人で取り組んだ分だけ評価点につなげることで、苦手な生徒が「あきらめ感」を持たせない取組を行ったことを報告した。

③ 和訳先渡し授業の実践

教科書本文を要所要所で区切った和訳を事前に配布することで、予習段階や語順の理解に効果的であると報告を行った。

④ 表現練習工夫の実践

ワークシートを用いた表現練習活動を行う場合に、生徒がより表現意欲を起こ

すものでなくてはならないことから、素材、写真などに工夫をすることで生徒が積極的に取り組み、定着しやすいことも報告された。

⑤ パワーポイントを使用した実践

本文に関わる T-F チェックを行う場合に、提示する英文を板書せず、口頭で続き、PC を介して提示することで、よりスピーディに確認ができること、また、Q & A においては、質問文を Dictation 形式で提示し、英文の確認も PC から提示することで生徒が聞き取った英文をすぐに確認できるということが報告された。

⑥ 犬上英語に対する生徒の感想の報告

英語の歌については嫌い、あるいは得意でない生徒もいるため、歌を通して何を伝えるかということも大切であろう。さらにメッセージ性のある曲を指導することで、将来大人になったときに歌の記憶から考えることができているのではないかと。

(実習を迎える学生に) 50分という時間の中で、実習生は様々なことを盛り込みすぎる傾向があり、重点をどこに求めるのか絞り込むことが必要。

4) 関山レポート「英語の授業をコミュニケーション広場に」

釧路商業高等学校 関山信雄

関山氏は All English 導入に向けた道教委主催の教育課程研での解説・実践発表を聞き、同僚を含め悲痛な声が上がったこと。そんな中、「All English の本質は、授業をコミュニケーション活動を行う上で、可能な限り英語を使ってみること。」との言葉を聞き、これまでの授業から変化させていった実践を紹介しました。

① 評価のあり方を明確にし、1コマの中で完結する課題と、音読・コミュニケーション活動に取り組みせることで前向きな意識を持たせ続けられることを報告した。

② ペアワーク・グループワークがコミュニケーションの質を高めること。

③ 1コマの中で、思考過程と学習活動、言語活動の流れを「日本語→英語」を中心にしていくこと。

④ 読解と表現活動の観点から、必要なものをしっかりと理解させること。

パフォーマンステストについては、どの段階の生徒にも学習のインセンティブとなるよう、チャレンジする意識を高める工夫を行っていくことを報告した。

ALT との授業では、継続的、計画的な取り組みは不可能なため、アクティブな授業づくりを主眼にし、

ア ALT との関係づくり、ALT を歓迎する雰囲気伝えること

イ 生徒をお客さんにしないこと、英語をあきらめさせないこと

ウ ALT にきちんと向き合うこと

最後に「ことばを学ぶことは、生き方を学ぶこと。それはお互いの幸せと平和につながること。」と締めくくりました。

パフォーマンステストの実施にあたっては、生徒との信頼関係が築かれていることがとても大切であり、学習の成果が試される場所であること。また、生徒が内容理解をしているか否かということについてどう判断するのか。

(2) 2日目

1)佐藤レポート「ビジネス英語の取組」

芦別高等学校 佐藤琢磨

佐藤氏は「商業」の中で扱われている英語について、ビジネス実務の英語単元における実践を報告しました。

①単元の構成

1章 国際化とコミュニケーション

Chapter 1 国際ビジネスとコミュニケーション

Chapter 2 国際化の進展とビジネス

2章 ビジネスの会話

Chapter 3 国内での接客

Chapter 4 入国

Chapter 5 商談と会議

Chapter 6 帰国

3章 ビジネスの文書

Chapter 7 電子メール利用

Chapter 8 ビジネスレター

Chapter 9 貿易取引

Chapter10 ビジネス文書

②授業の進め方

3単位のうち月曜日の1時間のみ、英語科・ALT・自分の3名で行い、英語科は会話の部分で指導し、Amazonから商品を購入する段階では自分が主体となって活動する実践が報告された。

ア 教材づくり

内外価格差を利用して利益を出すビジネスについて指導し、英語を使うことができる新たな「稼ぎ方」が可能になることを指導。

イ HP内の英語の理解と商品を探す力をつける手立てとして、補助的なワークシートを利用すること。

ウ 授業の中では実際に購入することはできないため、教師自身がクレジットカードを使って、海外から購入した商品を見せることで英語に対する学習意欲を高められるようにする。

エ 内外価格差について興味を示す生徒は少なかったが、現在の学習が実際の社会とどう結びついているかを伝えることで、生徒の学習意欲をさらに高めていくことにつながる。

2)討論から

両日とも学生の参加が多かったことから、指導にあたって配慮すべきことにはどんなことがあるのか、現場の生徒の願いをどうとらえ、英語を使える場面をどう設定していくか、安倍内閣が進めている教育政策の問題点はなにか等々について話し合われた。

礼文では海外からの旅行者の数に比較して、英語を話すことのできる人材が少ない

いため、中学校では外国人客を意識した取組を行い成果を上げている。釧路商業高校ではパワーポイントを用いて自分の街を紹介するものを英語で作成する取組を行っている。

また、地域社会について通じている教師が、それぞれの地域で学習した英語を活用できる場面を見つけ、生徒に提供してあげることも大切である。

生徒を英語によるプレゼンコンテストに参加させた実践からは、英語が得意ではなくても、しっかり努力し、良い発表をすることで生徒はより自分を高めていくための行動に移ることが明らかである。

外国語を学ぶことで、海外から見た日本の美しさに気づき、自分を見つめることができる。単に英語を使うか使わないかでとらえた場合、指導にも限界が生じる。指導する側は、どれだけいい教材を選び、英語を指導する目的を明確化することで、英語を通して様々な考え方や新たな生活や世界を知ることができる。

文法の指導はどうあるべきかということも話し合われた。文法については、毎年議論されているが、学校での扱いや教え方については結論がないものでもある。文法を教えることは、「もう時代遅れ」と囁かれることも多い時代ではあるが、外国語として限られた時間で学んでいることや、生徒が実際に使用する問題集の項目を考慮した場合、最低限の用語を指導していく必要はあるであろう。

教員養成の学部での授業状況についても話題が上がった。最近の傾向として、文科省の進める Active Learning という考え方もあり、その手法を用いた模擬授業を多く展開している実態がある。

4 見えてきた課題

現場の教員の参加が少ないことから、学生が参加されても、現場の声を聞くことがなかなかできないという問題がある。組織や学校間で声かけをするとともに、高校の修学旅行時期を避けた日取りを考慮する必要もあるのではないだろうか。レポートも3本のうち、2本が司会者、共同研究者によるものであるということは、参加する大学生にとっても満足できるものにはならないだろう。

また、小学校英語が教科化されるという動きを踏まえ、小学校教員の参加を積極的に呼びかけていく必要があると同時に、中高教員の積極的参加が望まれる。